

道東オホーツク海側内陸部における擦文文化の検討へむけて

—土器圧痕調査からの展望—

太田 圭 (東京大学常呂実習施設)・林 正之 (大田区立郷土博物館)

小久保竜也 (東京大学大学院)

1. 発表の動機

(1) レプリカ法による土器圧痕調査から

美幌町元町2遺跡で画期的な成果があった。雑穀利用の波及ルートとして道央部と道東部内陸部の地域間交流や直接的な接触の可能性が考えられるかもしれない。

(2) 紡錘車の集成から

紡錘車の体系的な検討はない。道東部では発掘調査済みの資料をもとにした堅穴1軒あたりの紡錘車出土数は少なく、ほとんどが土製である。擦文文化を特徴づける要素のひとつである紡錘車はどのように道東部に波及し、受容されたのだろうか。

2. 発表の目的

オホーツク文化末期～トビニタイ文化と交渉関係にあった道東部の「擦文文化」はどのようなものか、道央部の擦文文化が波及したことが道東部における擦文文化の「成立」なのか、道東部における擦文文化の具体的な文化要素の波及・受容は明らかにされているのか、内陸部遺跡の評価は「トビニタイ文化」の視点での評価が多いがそれでよいのか、という疑問を検討する方策を模索する。

3. 時間軸 (表1)

東北北部の時間軸は、辻編 (2007)、北東北古代集落遺跡研究会 (2014) を参照した。道東部では擦文文化前半期の資料は少なく、資料が増加する後半期も宇田川編年後期後半～晩期の土器編年が細別編年として整備されていない (太田 2022)。近年、B-Tm ならびに To-a 火山灰の年代が見直されており (Hakozaki *et al.* 2018)、北日本全体の土器の暦年代比定は見直し段階にあるといえる。

表1 時期区対比表 (太田 2022 の表2 に加筆 ; 「従来」の年代観で暦年代比定)

本稿	塚本 (2002)	宇田川 (1980)	榊田 (2016)		菊池 (1972)	おおよその暦年代
前期	4期	前期	擦文第2期前半	北大3式2期	トビニタイ1式	9世紀前半～中葉
	5期		擦文第2期後半			9世紀後半～10世紀前半
中期前半	6期	中期	擦文第3期前半	トビニタイ2式	トビニタイ土器群Ⅱ	10世紀中葉～後半
			擦文第3期後半			11世紀前半
中期後半	7期	後期	擦文第4期前半	トビニタイ3式	中間的な土器群・トビニタイ土器群Ⅰ	11世紀後半
後期前半	8期		擦文第4期後半			12世紀前半
後期後半	9期	晩期	擦文第5期	トビニタイ4式		12世紀後半
晩期	10期					13世紀代
	11期					

従来、AD926、AD929、AD937～938 など
AD946年の冬に決定
Ma-bはAD946年の冬以降

4. 予察—道東オホーツク海側内陸部における擦文文化の検討試案—

(1) 道東部における擦文文化前半期 (8世紀～9世紀中葉) の資料の分布 (塚本 2012)

8世紀 (塚本 2～3期・早期) オホーツク海沿岸と根室地域ではオホーツク文化の遺跡・遺構から少数の擦文土器が出土するが擦文文化の堅穴はない。甕のほか坏が出土する。一部の地域を除き、石狩低地帯と土器の属性は共通する。釧路・十勝地域では、沿岸部の遺跡から擦文土器が出土する。墓坑を伴う小規模な遺跡からの出土はあるが、堅穴を伴う擦文土器主体の遺跡はない。坏は出土しない。石狩低地帯との共通性が確認される一方、文様等の属性に個体差や独自性が確認される。

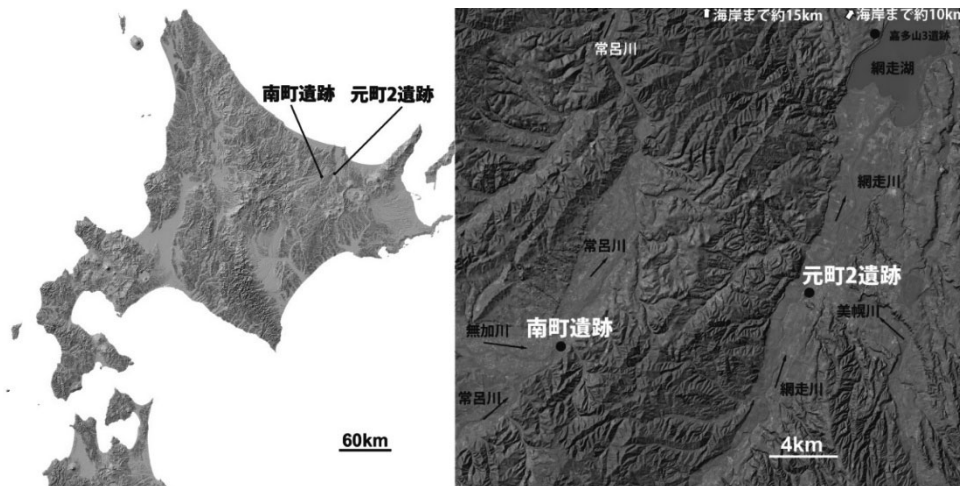


図1 元町2遺跡と南町遺跡の位置（国土地理院地図をもとに作成）

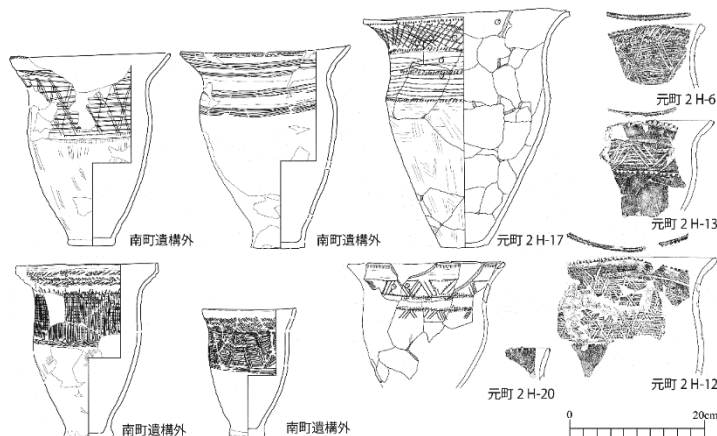


図2 元町2遺跡と南町遺跡から出土した土器（美幌町教育委員会・美幌町郷土史研究会 2011、市川 2023）

9世紀前葉～中葉（塚本4期・前期前半） オホーツク海沿岸・根室地域では沿岸部のオホーツク・トビニタイ文化の遺跡から擦文土器が出土し、オホーツク文化の痕跡がない遺跡や内陸部からも出土する。竈穴を伴う擦文土器主体の遺跡はない。甕のほか坏が出土する。前段階の太平洋側の要素もあるが、石狩低地帯の土器と大きな違いはない。釧路・十勝地域ではトビニタイ土器の出土と重複するように分布する例が多い。内陸部の遺跡にも擦文土器の出土範囲が拡大する。竈穴を伴う擦文土器主体の遺跡はない。坏が少数ではあるが出土するようになり、甕の属性の独自性は弱まる。

（2）立地と土器、住居構造からの検討の可能性

美幌町元町2遺跡（美幌町教育委員会 1986、美幌町教育委員会・美幌町郷土史研究会 2011）と北見市南町遺跡（市川 2023・2024）、網走市嘉多山3遺跡（網走市教育委員会 1993）は道東オホーツク海側内陸部に位置する拠点的な集落で、元町2遺跡と南町遺跡は河川の合流点付近に、嘉多山3遺跡は網走湖西岸に立地する（図1）。出土土器（図2）から元町2遺跡は前期後半～後期前半、南町遺跡は前期後半～後期後半（主体は後期）、嘉多山3遺跡は中期後半～後期前半に継続する。

表2にみる元町2遺跡の住居の異質さを探るために、カマドの壁付設位置・煙道の長さ・煙道断面形をもとにした住居分類案（林 2023：図3）を用いて地域間比較を行う。

元町2遺跡の住居構造は、道東オホーツク海側沿岸部の擦文文化後半期の大規模竈穴群でみられる住居の構造と異なる（I類）。一方、嘉多山3遺跡のトビニタイ文化の住居を含む住居類型（仮K類）は南町遺跡（市川 2024）や12世紀代の常呂川下流域の竈穴群と共通する。

表2 元町2遺跡・嘉多山3遺跡と12世紀代のオホーツク海沿岸部の拠点的な集落遺跡の住居構造比較

比較項目\遺跡名	元町2遺跡	嘉多山3遺跡	常呂川下流域の遺跡群
時期	9世紀後半～10世紀	11世紀	12世紀代
住居規模	平均4.02×3.55(m)、一辺の長さ：2.54～6.08 (m)	平均5.51×5.35(m)、一辺の長さ：4.60～7.40(m)	平均5.65×5.30 (m)、一辺の長さ：3.00～9.97 (m)
平面形	方形偏圓だが隅丸方形や辺が直線的ではなく崩れた方形が多い。	隅丸方形	隅が整形された方形が基本で隅丸のものが少数確認される。
基本柱穴配置	4支柱穴+支柱穴・壁隅ピット、部分的な壁柱穴、住居中央・壁際や壁穴外に不規則なピット	4支柱穴 (+支柱穴)、4支柱穴+壁穴外ピット	4または8支柱穴
1軒あたりのカマド	1～5基	1～2基	1～2基
カマド位置	南・南東・東壁の偏った位置が多い。北東・南西の場合や壁の中央や中央を軸に対称の位置の場合もみられる。	南西壁中央、2基の場合中央を軸に対称の位置で軸に寄って近接する例が多い。南と東の壁の異なる壁に付設される住居が1軒。	南または東の壁中央、2基の場合中央を軸に対称の位置が多い。北寄り・西寄りに設置される住居もある。
住居分類	I類	仮K類	仮K類
カマド掘り方	70%以上が地下式。11世紀代の住居にも地下式が残る。	大多数が半地下式とみられ、1基地下式とみられる(断面図がないため判断不可)	半地下式が大多数で、地下式は稀。
カマド煙道	長煙道B類>A類>C類	長煙道(断面図がないため分類不可)	大多数が長煙道C類
付設炉	約55%の住居に炉が設置。トビニタイ文化の影響のある住居は6軒あり、石囲炉が付設またはカマドと併設。地床炉のみでカマドが併設されない住居もある。	すべての住居に1～2基の炉がカマドに併設されている。トビニタイ文化の影響が強いコ字形石囲炉+カマド2基の住居2軒。	住居内に炉が併設される住居が大多数。地床炉のみでカマドが併設されない住居もある。
焼失率	約25%	約17%	約23%。常呂川河口右岸は約58%。
推定される影響	9世紀前半の石狩低地帯のI類住居からなる集落の影響、トビニタイ文化の影響	元町2遺跡の影響、道北日本海側、石狩川上流域に進出した仮K類住居からなる集落の影響、トビニタイ文化の影響	道北日本海側、石狩川上流域に進出した仮K類住居からなる集落の影響

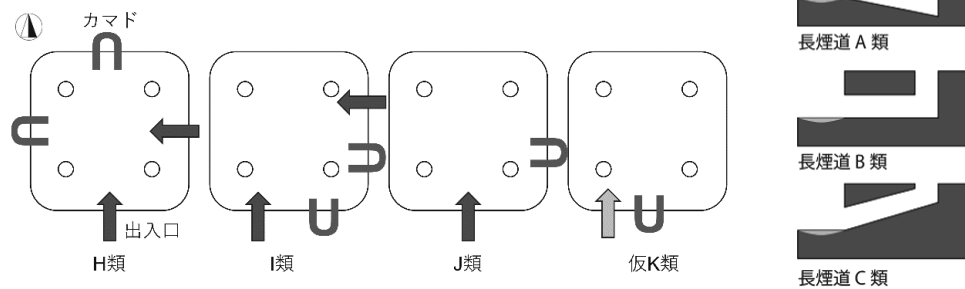


図3 カマド付設位置と煙道断面形の分類 (林 2023)

表3 東北北部～道央地域のカマド付設位置と煙道形状、芯材の変化 (林 2023)

時期\地域	住居類型	主体の煙道	長煙道類型	特記すべき芯材	備考	
7世紀	石狩低地帯	H類	長煙道+無煙道	多様 粘土+木芯	詳細不明	炉を持つ住居が併存
		I類	長煙道	B類主	甕を用いるものも一定数	H類住居より優勢
	上北南部	H類	長煙道	多様	長胴甕、筒型土製品	甕の芯材となる筒型土製品の出土例あり(カマドは未確認)
	三八	H類	長煙道	多様	長胴甕、加工石材、特殊土製品	特殊土製品は、筒型土製品と板状土製品
8世紀前半	二戸・九戸・閉伊	H類	長煙道>無煙道(ほか)	A類少 石組、粘土+(木芯)	加工石材	無煙道、壁から離れたカマド(二戸・久慈)
	常呂川北岸	H類>I類	長煙道	C類主	加工石材	南岸とは異なり、甕の芯材は確認できない
	常呂川南岸		長煙道	A類主	長胴甕>加工石材、特殊土製品	特殊土製品は、筒型土製品と板状土製品
	花巻・北上	H類	長煙道	B類主	長胴甕を用いるもの少数	
	水沢	H類	長煙道	多様	長胴甕を用いるもの少数	
	津軽	H類	—	—	長胴甕を用いるもの少数	集落出現期
	鹿角盆地	H類	長煙道	B類主	甕を用いるもの多数	集落出現期
	横手盆地	H類	長煙道	A類主	甕を用いるもの多数	
		I類	長煙道	B類主	甕を用いるもの多数	
	8世紀後半	石狩低地帯	I類>H類	長煙道	A・B類主	甕を用いるものが一定数
石狩低地帯より西～下北半島		H類(主) 仮K類(少)	長煙道	A・B類主	甕の利用例が確認	炉を持つ住居が併存。9世紀前葉には終焉。同一住居の向かい合う壁にカマドを付設するH・I類「折表」型の存在。一部は9世紀後半以降も継続
上北南部		H類	長煙道	A>B類主	長胴甕	北に同じ要素の集落が拡大
三八		H類	長煙道	A>B類主	長胴甕、加工石材	
二戸・九戸・閉伊		H類	長煙道	A・B類主 石組(二戸・閉伊)	加工石材	閉伊はC類も同程度で、A類が相対的に少ない
常呂川北岸		H類>I類	長煙道	A>B類主	加工石材	南岸とは異なり、甕の芯材は確認できない
常呂川南岸			長煙道	A>B類主	長胴甕>加工石材、筒型土製品	
花巻・北上		H類	長煙道	A>B類主	長胴甕を用いるもの増加	
水沢		H類	長煙道	B>A類主	長胴甕を用いるもの増加	
津軽		H類	長煙道	A類主	長胴甕主体	H類集落の増加・拡大
9世紀前葉	鹿角盆地	H類	長煙道	A・B類主	加工石材	H類集落の微増・拡大
	横手盆地	I類	長煙道>短煙道	B・C類主	長胴甕の利用例が確認	

東北北部太平洋側地域への古墳文化の流入以降、日本海側に集落が出現し始める7世紀前半頃まで多様であった煙道構造は、時期が下につれ長煙道が主体になる。東北北部～石狩低地帯では時

間経過とともにH類（太平洋側住居）とI類（日本海側住居）の干渉・共存・交替の様子がみてとれ（表3）、集団間交渉の手がかりとなりうる。カマド構築の面では、本体部や煙道の天井部や袖部、側壁に用いる芯材に異なる地域間で共通性が確認される。住居類型では、9世紀前半に石狩低地帯のI類主体の集落内に仮K類が出現する。9世紀後半～10世紀にはこの仮K類が北海道島の主流となり、東北北部と北海道の間で様式にギャップが生じる。9世紀後半以降に出現する道北日本海側や石狩川上流域の集落も仮K類+長煙道C類の要素をもち、これが道東オホーツク海側の大規模堅穴群の主要素となる。元町2遺跡では9世紀後半に1段階古いI類や地下式煙道や長煙道A類といった要素が確認され、仮K類+長煙道C類住居主体の集落が展開する時期やルートとは別に、元町2遺跡を道東オホーツク海側内陸部で形成した集団の移動があった可能性があり、道東部に進出したルートは日本海→オホーツク海沿岸・上川盆地→石北峠だけではなく、恵庭・千歳方面から太平洋側沿岸ルートの可能性も考えられる。嘉多山3遺跡のトビニタイ文化の素地となった擦文文化の要素は南町遺跡と共通し道東内陸部間での交渉関係があったかもしれない。平安時代末には東北北部と道東部とでは住居・集落構造は大きく異なり直接的な交渉関係は住居から確認できなくなる。

5. 展望

キビ利用が集団移動に伴った可能性を考えると土器の圧痕調査から「雑穀（キビ）の分布」を追うことや本発表のような「住居構造とカマド」の地域間比較により道央部以西から道東部への文化要素の波及・受容を具体的に検討できるだろう。また、砂底土器（櫻田 1997、利部 2000、市川 2024）やカマド廃絶儀礼（堤 1991、丹治 2013、今野 2023）なども今後、検討の余地があるかもしれない。

本発表にあたり北見市教育委員会の市川岳朗氏にご教示いただいた。本発表は、JSPS 科学研究助成事業補助金基盤研究（A）23H00010（代表：菊地芳朗）の成果の一部である。

引用文献

網走市教育委員会 1993『嘉多山3遺跡 嘉多山4遺跡』

市川岳朗 2023「北見市南町遺跡の擦文文化期末報告資料について（1）」『北見博物館研究報告』4：1-64

市川岳朗 2024「北見市南町遺跡の研究」『北見博物館研究報告』5：1-56

今野公顕 2023「盛岡市内の古代堅穴建物跡における「カマド納め」について」『盛岡市遺跡の学び館学芸レポート』6：1-73

太田 圭 2022「道東地域の擦文文化における生業基盤成立過程の基礎的検討」『アーキオクレイオ』19：13-40

北東北古代集落遺跡研究会 2014『9～11世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北世界の実態的研究』

櫻田 隆 1997「底面に砂粒を付着させる土師器とその分布範囲について」『蝦夷・律令国家・日本海』：281-295

利部 修 2000「平安時代の砂底土器と東北北部型長頸壺」『考古学ジャーナル』462：19-23

丹治篤嘉 2013「カマド燃焼部の底面～下部に敷かれた土器」『福大史学』82：19-42

塚本浩司 2012「トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点7号堅穴出土の擦文土器（土師器）について」『トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点』、pp.253-270

辻 秀人編 2007『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』

堤 隆 1991「住居廃絶時における竈解体をめぐる」『東海史学』25：93-114

林 正之 2023「墓制と建物から見たエミシ社会の動態」『古墳館歴史講座第3回 資料』おいらせ阿光坊古墳館

美幌町教育委員会 1986『元町2遺跡』

美幌町教育委員会・美幌郷土史研究会 2011『元町2遺跡』

Hakozaki M., F. Miyake, T. Nakamura, K. Kimura, K. Masuda and M. Okuno 2018 Verification of the Annual Dating of the 10th Century Baitoushan Volcano Eruption Based on an AD 774-775 Radiocarbon Spike. *Radiocarbon* 60(1): 261-268